

詩南車

特輯第十九號



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



訂正 目次下段久高を高久と入替へ、五頁二首目第五句卒土を率と七頁九首十首目天日嗣を天津日嗣と加へる、二十頁三首向ふ峯をつに五首目の第三句圖かを圓か同く第五句歎案を歌案し六首目第四句うつろを、うつつに八首目第三句なしとやらをうと九首目第四句萎元をえに十一首第三句吾にを子に十二首第三句菊採りを筆とす二十一頁七首目第四句苗といてをりに同五句植ゑをいそしむと二十二頁四首目第四句君のをかとし二十四頁十二首目第五句美つめを見つめ十三首目第二句こえてをこめてとす、二十七頁下段六首目桓なんを植と追加訂正す。

本號は特に校正者一人詰切で注意を加へたのだが前言の理由と原稿に走り書き大和かなが多いので見間違ひも多であつた。次からは楷書町字に書く事を希望します

菊 盛

高 久 晚 霞

みそなはず雲井の菊の色も香もやまと鳥根に充ちて匂へり
瑞威ほぐ旗のひらめく賤が家の庭にも匂ふ菊さかりなり
霜おりて草木ひれ伏す庭ぬちに色香を競ふ黄菊白菊

菊 盛

佐 川 満 壽 莊

折に逢ふ園生のさくの花さかり君に八千代の秋やらさける

御大典を祝ひ奉れる歌

只 野 清

おほみのり祝ふみ民の真心は持つ提灯の火より赤かり
み旗振る小さき子等も大君を千代榮にませと練りつゝぞほぐ
此秋は喜びみちて紅葉はもいま一しほの色まさるらん

菊 盛

中 柴 光 顯

かはらけに黒酒白酒を満へつゝ萬代祝ふ菊の大庭

萬代にいや榮えます兆かな黄菊白菊匂ふ御園は

いしほぎの歌

島 田 蘇 山

かけしねのかきねにそひて咲き出し黄菊白菊今盛りなり
とりとりの色はあれともいさきよき姿をめつる白菊の花

菊童菊の園にありて八千代を誦わりといふ故事によりて

君か代は八千代はものかよろつ代もわらへにめてむ黄菊白菊

御羽車うつります日

山 部 揚 臺

やすみしし我大君ゆかし原の昔かしこみいでます日はや

君 萬 歳

天さかるひなの翁もことほぎて笑む口の齒の二三ぞおかし
壽ぐ聲に都もひなもごよめきて君の御陵威ぞかゞやきにける

大嘗祭曉の御儀

むらさきの御空のとばりかくる時曉の大嘗いかし思ほゆ

菊 盛

佐々木 顯

まがきにも庭まで黄菊咲きみてりしばし見入れば風にさゆらぐ

御大典を賀ぎまつりて

武田 美佐子

高御座のぼります日を畏みてことほぎまつる卒土の民かな
陸奥のはるけき國ゆおほけなくも君がみいづを祝ひまつらむ
すめらぎの彌榮えますしるしぞと今日こそ菊の香りたかけれ

奉祝御大典

宮田 誠吉

かしこしや現人神のたちます秋津島根は垂穂満ちけり
大君のふませ給へる球儀こそ神なからなるためしなりけり

菊 盛

來む秋の日嗣の御儀のことほきに植ける菊はいまさかりなり
吹上の園の白菊波たてゝいまさかりなるかほりめでたき

吹き上のおゝしほ風に舞くるふ波かあらぬか咲ける濱菊

菊 盛 貧・富・自然

島田 丹光

賤が家の垣の破れにのぞきたる黄菊むれむれみのりことほく
金龍と名づけし黄菊おほらかに咲きてうれしきみのりことほく
天地の恵みに生れすこやか野菊盛りもいとめでたし

奉祝歌

木野 もみ子

君が代を口すさみつゝ食す國に幸多かれといのれる我等
高御座のほらせたまふ大君を祝ぎまつる如と咲ける白菊
大君のいよゝ榮わん大八洲御民こぞりて祝ふけよの日

菊 盛

佐藤 義家

秋津日にまさかるゝ菊の白まして御代のみのにあふぞかしこし
如露水のほど出づるらむ上の葉にじだれ咲く菊香のうれしかな

御大典を祝し奉つる

鈴木智子

天がした日出づも國の菊の花めでたききわに咲けるものかな
天地に今日あることを知るなるや朝の光にかほる白菊
たぐひなき佳き日の幸に門の菊朝日浴びつゝ咲き出でにけり
露おけばひときわはゆる黄菊なり白菊もよし日輪の出に
あめつちに満つるよろこび國あげてわが大君の世を祝ふかな

御大典を祝し奉る

佐藤 くらよ

高御座萬代かけて祝ふなり我日の本のみいづかがやく
高御座おます日の御子萬代にいや榮わませと祈る今日かな
八千萬あげて壽ふく今日の日を國のしるしの御旗さゝけて
天かける神も壽ふき護らん天日嗣の今日の御大典を
ゆるぎなき天日嗣の高御座外國までも御陵威かゞやく

奉祝俳句

瀬谷 一夢

日本晴れ悠紀田に拔穂する日も
菊の香や現人神の食す御國
天杯に菊の酒くむ閑居かな
鳳輦の晴れや老の眼は時雨
畏さや神代ながらの大嘗會
菊薫る豊明殿の御宴かな
黄菊匂ふ籬にかざり國旗哉
菊活けて御代祝く唐の國旗哉
御代祝ふ炭焼く小屋の國旗哉
菊の花かざして子等や御代祝ふ

御大典を祝し奉りて

只野 閑月

御大典ことほぐ菊の品定め
主基殿の御儀果つとや露白し

奉祝に寄せる

勝見 萬袋

大嘗宮ごもしびゆらぐ夜寒かな
御大典左近の櫻紅葉して
秋晴や南庭に並ぶ威儀の人
秋晴や首相壽詞を奏す聲
捧けまつる白酒黒酒や菊佳節
人垣や鳳輦拜む小春風
奉祝や賣出し競ふ冬の街
野も山もかざる錦や御大典
拜む氣て夜更の濠の小鴨哉

昭和戊辰秋の雜詠

片寄 文狂

秋晴れにりしき御代の舞樂かな
天高くみいづ仰ぐや京の秋
鹵簿はたる秋やぬかづく里の稻

天の時地の利人の和けよの秋
御園生に千代祝ぐ秋の小鳥かな

奉 祝

坂 田 守 穂

八紘に威高し菊の萬歳旗
草も樹もみな紅葉して千代見草

御大典を奉祝して

柴 原 梅 蔭

菊の園只打仰く御位

御大典を奉祝して

八 島 冬 全

日の司國の司に菊薫る

奉 祝

佐 川 滿 壽 莊

十一月六日東京御發策一路京都に行幸せらる

東海道五拾三次菊薫る

秋晴れや東海一路旗光る

十日即位の大禮を行はせらる

仰き見ら秋空高ふ澄む日哉

菊の香の國の八隅に満てる哉

秋晴の山河ごよもす歡呼かな

十四日大嘗祭

千五百秋の瑞穂足り穂や供へ物

朝風に瑞穂の御饗の香りかな

十六日大饗宴

君か代の八千代を酌まむ菊の酒

菊 八 吟

片 寄 文 狂

献上の菊にかこづく白衣かな

御 題

坂 田 守 穂

悠紀主基も納めて黄菊盛なり
精農に菊盛なり留守の庭

菊 盛

柴 原 梅 蔭

竹の園に勝れて菊の盛なり

菊 盛 り

高 木 柳 江

献上の菊盛りなり秋日和
門毎に旗立つ今日を菊盛り
にぎわしき平和の町や菊盛り

御大典勅題に因みて

八 島 冬 全

高御座せすめす日に菊盛る
瑞鳳も空に舞ふ日や菊盛る

宸 題 菊 盛

北斗莊 赤 羽 松 堂

天高く地は白菊の匂ひかな
空は群青白菊黄菊咲きたふ

菊

山 部 揚 臺

五戸の村菊に賑ふ日和かな
誰がなげし菊一輪の流れかな
雨戸繰れば灯影にゆらぐ菊の園

御大典をことぶきまつりて

八束穂の豊けき秋、御大典あげ給ふ
御氏ごち津々浦々も、大君の聖壽無窮を
ひたすらにことぶきまつり、萬歳の聲空にごよめり

落葉日記抄

1
×月×日 桐の大きな葉が散る、はらり、はらり、はらり
×月×日 白揚の小さな葉が散る、ちらり、ちらり、ちらり
×月×日 銀杏の黄い葉が散る、ひらり、ひらり、ひらりと
愛する樹の葉が、みんな散って
私の日記は、日増に寂しくなる
もう秋も昏れてゆくのか知ら。……

旅を想ふ

陽のじみた雑木林のはづれに
清楚な馬鈴薯の花が
紫色の夕靄をうけて細かく揺れてゐる。

無限の回顧を繼續させて聞いているよ。

音もなく信號標燈が青に變り
洋風な柱の上に孟夏の五月月がのぞいて
一沫の雲の流れを抱いてゐる。
(遠方から旅愁を盛って汽車は近づいて來るのだらう)

秋來る日

どこへゆくのか
今日も流れる
白雲のかすかす
わびしく草をしいて
病みの身を横たへ
じつと空を仰げば
あつい涙がちんでくる
あゝ、秋がくるのか

五色ヶ原

——山の詩篇——
彼女が病みはなけて幻想したのはこんな處ではなかつたか

只野清

君と臣水魚のむつみ、長へに八州の國は
美しき國、永久に日本の國は
安らけき國

下田直

2
華麗の夏の裝飾や單純な誇りを脱ぎ捨て
嵐時代を悦んで迎へる貴族的なボブラよ
お前の思想はなかく秘密らしいが
僕は成る避生的な衝動におそられる
そして……

寺崎浩

鐵道線路の工場下に
黙々と雜草の深く群れ生ねて
童話の幻燈のやうに月見草の四瓣の花が

この夕鳴咽する程疲れて
隙ない生活を哀しく憶ひ出て
孤影 この風景のなかを横過るとき
堪え難い旅情に疲れるのである。

館高重

空を流れる
白雲のつれなき

夕映

ばんばんばん……と
はちけあがりそうな
明るい感動

夕映が
柘榴の實にかがやいてゐる

中野勇雄

足もこから廣々と天まで縁によく上り
チングルマやシャクナゲの花々の亂れに大氣は澄み透つてゐる

立山連峯の雪溪を胎んだ風に
情念は純化し天と觸れ
飄々としてわれも又幻覺に生さる
彼女が「青い草原」「花々の香氣」と口走つてた白いベットの

夜の散策

君は口華やかな唄をうたひ
吾れは心にゆかしき詩藻をたふ
かくて
初夏の夜の散策に
香はしい道は
いと静かなる月影ただよふ――

空はボヘミヤ・ガラス

空はボヘミヤ・ガラスのやうに澄んで
コスモスや秋海棠の花が
十一月の空に咲きみだる
季節の悼まじき配列である。
空はボヘミヤ・ガラスのやうに澄んで
黄ばんだ太陽が

あの雲になつて浮んで来るのではないか
あゝ、あの草原の崖から
彼女が飛鳥のやうにやつて來はしないか
雪を含んだ草原がわが身を深く抱いてくれるのに溶ける――

神山 康人

やがて
ほのかなる風は
蛙のうたも誘ひ來たり
吾等が心の家は
はるかなる星の光りにも似たりき

藤井 芳人

鶴金の花のやうにひかり
哀し、黙想をころばす。

空はボヘミヤ・ガラスのやうに澄んで
風は白金の笛にて
セザンヌの秋の郊外の風景に
銀色の詩をかいてゆく。

霧の向ふに

高木 風外

霧の向ふに
何がある？
新しい
世紀の聲がある！
此足下から續く
我等の歴史の頂點が
例へば紀元元年の十字架の様に
キツ然として屹立して居る
おゝ、其所から聲はおこる
ワー！ワー！ワー！ワー！
ワー！ワー！ワー！ワー！
ワー！ワー！ワー！ワー！
ワー！ワー！ワー！ワー！
おゝ、今こそ霧の向ふに
新と力との聲がある

瓢たん

なつたのは
昨年と同じこと今年も
ゆがんだヒョウタンばつかり！
此男

其名は俺

どうも中庸で取れないと自覺はしてるが
かうもまあ美事にくねり曲つた事の
何と淋しくも愉快な共鳴だ

風が吹けば
お月様と一所に
ヤツサモツサとステ、コおどろ！
どろや

俺も
平凡な人生へ赤い尻をツン出し
ベチャ／＼と叩いてやらうか

もう故里へ歸ろうではないか

太田武

私は見る

ぶくれた風の中に浮いたちりの中に
或は自然の石の表情の中に深く
月のランプが點る夜中に
われわれの幸福が旅行してゐることを

又われわれは古里を憑きつけ

割青して深く入れ……………

石段を登りながら

「古里は何處にしまった」

あゝ私達の扉を叩いて

「もう古里に歸ろうではないか」

夜はじつと精神を焼き付けてゐる

青い地球のランプよ

そしてたのしみを放つ時の範ちゆうよ

夜は風笛を縮んで持つてゐるのでないのか

弟よ たてないお呉れ

母よ いま 高い熱のために たへ難き苦しさ

たごへ許された自然とはいへ

風よ 私の家にだけ吹きつけないでお呉れ

母は微かに睡みをあげて 私の姿に涙ぐむ

今はたゞ静かな休息のみ願つてゐるのに

自分よ 餘りに急がはしき 自分よ

だが而し 次第に病つかれてゆく自分を忘れない

SONNET

前田重夫

霧立ちには丘のしたみち

悲しみの影をさぐりて

わすらひのころに

ひきては歸へる空車

ながれもゆるく

くる、光りの

月・口笛

深川秀邦

コホロギが鳴き始めて

愛犬が何處にかへ行つて了つた青

私は今日も

日頃来た荒野に迷つて

聞えないとわ知り乍ら

吹きつゞけずに居られないこの口笛

片割月から吹いて来る風は

身にしみて冷い

紅く燈つて居た洋館の窓が

ハタと閉ぢられて

今宵も空しく月にたゞすみコホロギを聞く

私は忘れない

井上春彦

どんな微かな音でも

赤きかゞやきわたる一瞬

あゝ空になる空車

うちくろみたる木梢の諸葉

黙しつゝふるふなげきや

聴くにしもつかれしおもひよ。

ちからなき双手の重さに

胸を痛みて

足惱みひくか空車。

とよとよ

細川芳雄

滴たる葉つばの緑のなかつら

まつ赤なとまとをもぎどつては

そのまゝ がんぶり やるものだ

素足に露がひんやりと散り

うつすら霧が霽れる朝

誰でも無心な子供になつて

とまご がんぶり 〱 やるものだ

毎朝 毎朝

僕は

とまご畑で がんぶり とても愉快だ

秋の月

石井賢三

丘の上での空想

清水綾子

懐しい青草の香の漂つてくる

丘の上に腰かけて

じつと青空を見つめてゐます。

静かな足ざりて

私の好きになれさうなひとが

そつと

丘の上のぼつてくる様な氣がして。

いつまでも

マウシイ青空に見入つてゐます。

見上げた僕の瞳に

宵の明星が

何處かで秋の蟲が啼いて居る

秋の夜は静かなんだ

向の屋根が

オレンジ色に明くなつた

月が出るんだ

今夜も月が美しいぞ

2

僕は静かに空を見上げて

溜息をもらした

僕が月を全身にあびる頃

街の人々は寝つて終ふのだ

今夜も月が美しいぞ

月と酒もりする

島田丹光

―詩南社の同人へ贈る―

メドックのはろしおい味に

エヤーシツプを甘くくゆらし

鹽豆をかじる寂しいひとり酒宴の室に

いつも訪れるのは

なつかしい君らと置火燵をかこんで

くりぬき盆に山と積んだ鹽豆を

かじり〱語合つた思ひ出である

あゝあの頃はみんないゝ奴だつた

どんぐりのせいくらべと云はれても

眞面目に元氣に詩をかいてゐたつて

大した裝飾とでもない粗末な室ではあつたけれど

キリストの胸像や

ビンでどめてある『サイケの浴み』や

太いタツチのKの白筆の油繪の静物や

みんなしつくり合つてゐた

あゝみんな みんな溶け合つた雰圍氣に
夜のふけるのも忘れたつげな!

さぶしい俺を容れて呉れるのは
あのそまつな室ばかり!

冬の來るのが早い國のみんなよ!

置火燵を圍む席が

少し窮屈でなくなつたのに

俺の居ないのを思つてゐて呉れるだらう

みんなよ!

俺はうすら冷い室で

切ち抜き窓からのぞきこむ

月光にぬれた晩秋の夜の空に

あの室へのノスタルヂヤをぬりつけて

どこかに發酵する寒氣にじたり

じみじみとしみじみと

寒い月と酒もりをしてゐるよ――。

―在平懷古詩篇―

或る風景

片 寄 歌 二

氣まぐれの空に投げる
氣まぐれのながし眼にすぎない
粉雪が一つつ三つ
淡々と空から落ちる
むつつりした大地は
生真面目にそれを受けて居る

ちつとこの風景を眺めて居ると
大地の無益な努力の愚さに
かはれみを感じ
そしてその愚直さには
何かなし涙ぐまれる

見て居るとふと

同じ風景——忘れようとした傷手を

(あゝ生々した苦い追憶)

過去の追憶の中に見つけ出す

あゝあの時は

自分自身はこの大地であつた

思へばかすかに胸が疼く

あゝそして何かなし

自分が涙ぐまれる風景

曇り

空が悲んでゐる孤獨の異國人のやうに
涙ぐんだ眼が遠い所を見つめてゐる

山々はぼんやりと氣の抜けた影繪のやうに
遠い半空に描かれてゐる

町裏の煙突が一本

それは物悲しい表情として

危ふげな空の重心を支へてゐるが

空の重みはその深い吐息とともに沈んでゐる

雑詠

高 久 晚 霞

かせひきてしばし休みし牛乳のかほりよろしもパン食みにつゝ
平窪の思旨ゆ得たる四季咲きのつつじかそけく春の香を立つゝ
昨日まで朝日に映わし向ふ峯の林は秋の風に疲るゝ
庭隅に繞むコスモスにたよりつゝたゞ一もどの朝顔咲けり
窓を打つ風に夢の圖かならず疑られぬ夜半を歎案じけり
學校へ出て行く子等のさゝめきをうつろに聞きて再び疑ぬる
自動車は大地とゞろにわが立てし土煙りぬ大姿を消しぬ
乗る人のわれにかゝはりなしとやら揺れのはげしく自動車過ぎぬ
夕風にそよぐ葉の間を地に落ちし萎元無花果のかそけき音す
俄か雨打ちの強さは桐の葉をつぎ／＼と地に投ぐるにも似し
力得る術とぞ聞きて吾にいつか入れけむ鹽に金魚皆亡にし
備へたる刷毛にも似たる菊採りてかにかく書きし受付の前

雑詠

佐々木顯

山上の畑のありのみつぶらみのみのりたりけむめざましきまで
母と子と山上に居てその子はも土いちりしてすこやかならむ
山畑にのぼりて行けばすこやかに母と子としてつちにまみれをり

(以上三首吉野氏に)

幼な兒の胃腸そこなひその母の心いたためぬ晝夜となく
わがい行く柘の山路登りゆく親子つれだち樹の間にし消ゆ
筑波嶺のはるかに見ゆる夕映のさむけきまでにあかねさしけり
たをやめもをのこもおのもむつみあひてさ苗といては田植えそしむ
梅雨じめる近き野山の緑り深しこつみあひつゝ田植する見ゆ
幼な兒の百日咳のなか／＼にせき癒わがてに心にひゞく

雑詠

大村芙北

秋霧降り豆の下葉も色付きぬ羽重き蝶の二つ飛び交ふ
長雨に倒れし菊のいとほしみ文讀ますじて支柱さす朝

雑詠

佐藤 さらよ

黒々と一群鳥の渡り行く穂すゝきなびく夕燒の空
渡り鳥今宵はどこに宿からん汝が行く先は山疊なる
我が文を火にせむことの忍ばれず言ひおこしたる君いとほしも

手にかけて黄菊白菊咲き初めぬ君の土産の籠に生けなん
理科學ぶとんばとれぬと子は言ひぬ箒さか手にともに出て行く
淋しくも樂しからまし一人居の文よむ庭に落葉おとなふ

秋

武田美佐子

からたちの香ぐはしき實の色づきて此處にも深き秋のおもむき
夜の霧は冷く空にたゞよひてふと仰ぎみし星もまばゆき
晴れ渡る空に向へばわが心なごみゆくなり秋の眞ひるま

更けし夜は文かく窓の梧桐に時雨するさへなつかしう聞く
見はるかす山の緑の色さえて心清じき野路のあさかな

垂穂抄

高木風外

もろこしの垂穂々々の我裾に觸れて動けり一步一步に
今朝見れば昨日の垂穂いや垂れぬ明日にかも地に及ぶならしも
觸れやすき垂穂とはなりしもろこしの風ありやなしや又も動ける
深霧の雫とは成りホトホトに地に落つる音の中行く我は
雨かどぞふりさけ？見る深霧の高處の枝の雫しげしも

動物園にて

森花葉

猛獸の肌の匂ひぞ身にしみてこゝろめまひぬ弱き我れはも
生肉をやれば恐ろし檻の虎齒をむき吼哮し貪りて食ふ
白熊も狎れては悲し人工の流壺にゐて投げ餌をあさる
かるかやに秋の雲浮き樹の葉散り動物園の晝の静けさ
泰然と獅子うづくまり鐵檻のそとの人等をうち眺め居り

文がら

矢戸正勝

文がらの燃ゆるを凝つと見つむれば紅き火焰の畏ろしきかな
何故か知らぬ涙の湧き出でて山に林に我が心泣く
酒飲めばうき事増すを何故か世の人多く此れをたしなむ
幾度か語らんとして云ひよどむ己が心のその苦しさを
いらだち己が心も「先生」と兒らに寄られて柔らざしかな
けふも亦悔恨多き過去となり心泣くらん愈る我れは

湯の宿にて

宮田青波

戀ひ戀ふる人しなればおもむろに今かつぎ來し行李ほごけり
啄木鳥の木つゞく音のこだまして湯神やしろの森の静けさ
せゝらぎの音のかよひて鑛泉の宿の寐さめよろしき
電燈も黄ばむころなりひとしきり高鳴く虫をきつ湯にあり
練絹の肌になつはるそが如しひとりひたらう朝の鑛泉
鑛泉のぬもりやはらかしながと有明け燈美つめ湯にあり
湯のけむりほの立ちこえて圓卓の仙洞しるく芳香はなてり

秋 日 詠 草

雜 詠

澤 本 富 之 助

妹の歌を讀みつゝふと寂し金の腰みのはやみわてけり
土工等の子供はあはれ河原邊に強き陽を浴び砂利ふるき居り
貧しけど今日も雨なり寂しくも家にこもりて子等と遊べり
秋なれや沼邊のおどろの葉は散りて水面たゞきてとぶ鶺鴒のみゆ
鶯色に枯れて落ち得ぬ梧桐の葉に夕陽しみにらに寂しく照るも

雜 詠

島 末 眞 之

ポンと一つ柱時計の鳴り響くこの八疊の深きしずもり
この朝明山路を行けば栗の實の池の面に落つる音澄みにけり
二日三日續きし雨の夕晴れて松原になく鯛きこゆ
秋べぞと思ふ夕邊の親じこや夕飯の後を濱に出で來ぬ

白 木 英 尾

夕のかり去りて茶園のさぶしさにしろくこて茶の花ひらく
秋の日を花一ばいに受けてゐて黃菊白菊搖れる大きさ

秋のなゝくさ

過 ぎ し 日

清 水 綾 子

美しくダリヤは咲けど過ぎし日のいみじき思ひ永久にかへらじ
過ぎし日の夢もかくては懐かしき思ひにまじりてかなしきものを
手にとりて草の露にも口づけぬ人なつかしき薄月夜かな
歌ごゝろ覺えし日より我が思ふことおほかたはかなしきことし

窓

鈴 木 佐 代 子

とざされて小暗き我的心にも月あかりさす窓のあれかし
窓に依りて道ゆく人を眺めぬ淋しき時の此の頃のくせ
寂しさに今日も暮るゝか窓により静かに流るゝ夕雲を見る

病める日

丘 八 重 子

淋しさに堪えんとしてはいくぞたび身を偽りし我にあるかな

酒君のかたへにありて匂ふかも山茶花のはな木犀の花

旅 に て

小 泉 貢

旅浪の旅の先きにて初労働ベンを握りし華奢指挫く
無氣味なる雜音の中に吾は生く耳ぐわんどて斯くな世なるか
ちろくゝと蟲の音哀し夜深き幻追ふて暗がりを行く

秋の川邊に

島 田 丹 光

水脈は細く瘦りて小石ひろし岸の穂すゝき秋さびにけり
水澄みて映る蒼空秋河えて水底に透る白き石かも
杭足ののびたづ橋のふちに立ち流れにうつる己をみつめき
大根の肌白きをみつめつゝ腰にしむ水に秋を思へり
むれすゝき葉すれさやゝ秋を鳴り水底に映る穂はほゞけおり

澄み行く秋

佐 藤 義 家

折々は森よりもるゝ秋の陽にかられたの實の黄をませる見ゆ

大地に影しきつゝも去りにける蜻蛉さかしの委わすれじ
風なぎの畦にまみゆる二すじの薄の穂さきに蜻蛉とまれり

雜 詠

佐 藤 清 子

何事も語り明さむと友を訪ね黙して歸る秋の野路かな
乙女なるかはそさ愁忘れむと子等にまじりて石投げてみし
音もなく秋の夜空をいろどりて夜ふけに燃ゆる遠き火車かな
茅原に鋭く白き陽の降りて眼底に泌むる秋の色かな

秋 草 の 花

坂 本 直 枝

一人のみ知るうれしさを持つといふあはれなる花つりがねの花
秋の日をものおもひ居れば涙湧く甲斐なき我をはかなみにけり

福 島 美 佐 子

清水汲む谷の山々明け初めて素足にふるゝ露の冷たさ
月洩るゝボブラに倚りてしみんゝとふるさと思ふ心切なり

しみんと我が貧しさを思ひつゝ沈む夕日を眺めてありぬ

新舞子にて

水町 冷子

唯獨り砂に憩いてきゝ入りぬ晴れたる空の波のびびきを
東海にかにとたはむる啄木の歌を思ひぬ砂にまろびて

雑詠

石山 菊江

嫁ぐ身は離ひし幸の數々を永遠につゝかむ事な祈らむ
色あせて風にはろりとみそはぎの散るるを見るも悲しかりけり
みればぎに思ひを告げむ人もなし淋しき秋にうづく思ひは

島山 美志子

まがつみのいかなる日ぞとなげくまではがらかに澄むか朝の瀬
の音

これの世に云ふべきことはつきにけり天地と共に君よ泣かまじ
うつし世のいさゝか事にさらはれずはがらかに生きて樂しかり
けり

反逆兒のうた

丘 良子

素直なれとのみ云ひ給ふはゝとはの涙に我は守るべかりけり

ひた泣きて笑ひつくるる日頃かも生きがたき世に飲食もあはれ
まかなしく想ひせまれり夏の夜にいまはふたゝび會ひがたきぞ
と

想ひ出

大里 彌生

はかなくも白き想ひに我が心沈みて空に夕月を見る
いつしかに忘れしものをこの宵によそ想ひ出でて哀しき増しぬ

菊の祝

木野 もと子

柿みのる背戸にひらめく日のみ旗この山里もけふを祝はん
けふの日を祝ふ心のこるしにと庭に植なん白菊の花

月二題

若草 登俱子

とたん屋根にうつる光も濃く淡くおりなしにけり十五夜の月

別はせるをがれすゝきに照る月はふけ行く秋を知らずなりけり

秋十句

酒井 耕影

月下声晴れて浦邊雁渡る
狹霧立つ池畔の杜や鶉の篝火
朝寒むに羽重し今日を減る蜻蛉
金風たわゝ八束穂稔る豊の秋
泣き捧く御衣や配所の月今宵
中洲にも發電所あり秋の川
師に背き悔ゆる夜頃やいと泣く
三軍を統ふる御野立花野哉
幽薄迎ふ三十六峰錦着く
菊晴れや萬歳傳ふ旭旗波

八島 冬全

圓百步袖に白菊黃菊の香
萬象や菊靜觀に香の高き
菊日和我れ論るべき庭持てり
稻の香の道中長し陸奥の里
稻薙村の長者の門廣し

山部 揚臺

新米

粒數のあて事に興す今年米

新米の俵灯影に酒の味

天の川

窓に見る都なつかし天の川

朝寒し

白壁にあたる日ざしや朝寒し

露

菜を買へば露置かれけり拭ひ椽

稻

廣庭を稻にとられて子等所在なさ

枯野

神の森凌して廣き枯野かな

千鳥

波を蹴つて飛び渡る限り千鳥かな

當季雜詠 五句

赤羽 松堂

初嵐玉蜀黍の八九尺

鵜牛かくふきてあり秋の川

馬嘶ひていよ／＼高し秋の空
鬼火の青きもありて露時雨
朝露に暫しうつろふ葉鶏哉

北斗莊小情

閑に居て身はみの虫の寒さかな
般賑の聲は遠ざけて北斗莊
風椽に遣ひしてと見む北斗莊

京

光

緑日の夜を更かしけりバナナ賣り
島原の遠音太鼓や京の夜半
姫買ひのしどろに似すや彰化粧

秋六題

病みて聞けば汽笛も悲し秋のくれ
柿おとす等の長さや鳥のこゑ
振りむけば北斗もよるふ秋のみち
風出て、暮れゆく野路や小鳥なく
行く汽車に陽のうららかなや秋の影

南椽に障子張る手や百舌鳥のこゑ

佐川満壽藏

此秋や何よりもまづ菊の出来
満園の菊静かなる朝日哉
満庭の菊の香むせふ小雨哉
月を淵に漕はただ金波銀波かな
初霜の多さを語る爐邊かな
小松山木の間木の間の紅葉哉

風

勝見萬袋

玲瓏と轉はす玉や啼河鹿
盗み見る女の連れや草角力
秋の蝶 秋をよそめの遊び哉
竹斗り春と呼はれて葉鶏頭
八束穂に日の匂ひけり稻穂
蟋蟀や宇屋の跡の祖師御堂

本号執筆者住所録

(イロハ順)

本多 朝忠 平町八幡小路
大村 隆 號茨北 久保町磐城中學校
片寄文四郎 號文住 同五丁目拾四番地
勝見 萬袋 同南白銀町
高久 忠 號晚霞 同田町六拾四番地
高久病院主
只野 清 閑月 同胡摩澤貳拾九番地
地 磐城高等女學校
高木 柳江 石城郡内郷村高坂字御殿山
武田美佐子 磐城高等女學校寄宿舎
中柴 光顯 平町仲間町 磐城中學校
中野 勇雄 同二丁目參拾番地
矢島 冬全 同掻埜小路四番地
山部 正勇 號揚臺 同紺屋町八番地
地 磐城高等女學校
山口 重男 號光風 同揚土拾五番地
地 磐城中學校
赤羽鐵太郎 號松堂 同北日町八拾九番地
酒井國三郎 號耕影 同南町酒井醫院主
坂田 藤助 號守穂 同武丁日
佐川滿壽莊 同五丁目拾四番地
佐々木 顯 同紺屋町五番地
佐藤とらよ 同古鍛冶町
宮田 誠吉 號青波 同鍛冶町貳拾六番地

島田安蘇太郎 號蘇山 埼玉縣兒玉郡旭
村沼和田

穴戸 正勝 平町古鍛冶町松堂院主
柴原 梅蔭 東京市千住町牛田三丁目貳
百拾六番地
森 花葉 石城郡湯本町表町惣善寺
關口 鏑助 平町白銀町 平商業學校
瀨谷才次郎 號一夢 石城郡内郷村谷川瀬
鈴木 智子 平町南町
佐藤 義家 同七軒町參拾貳番地
島田 丹光 同掻埜小路壹番地
石井 賢三 同大工町拾九番地
秋山 愁子 同材木町
片寄 耿二 同五丁目貳拾八番地
白木 英尾 平町高月臺
佐藤 清子 同仲町六番地
水町 冷子 同大工町拾四番地
木野もと子 同鍛冶町貳拾六番地宮田方
福島美佐子 同八幡小路
石山 菊江 同大工町
若宮登俱子 同鍛冶町宮田方

遠藤帽子店

電話 七二六番
電話 八三四番

誌友懇親會

期日 十一月廿四日(土曜)午後六時半
會費 二十錢當日持參
場所 平町五丁目廿八片寄方詩南社

平町二丁目

正誤表
二〇頁から二行目平窪村の愚言を著者に訂正。同後より六土行煙りの大要を訂正。二十七頁若草登俱子を宮と訂正。二十九頁前から五行目風椽に遣ひしなはに訂正。同下の佐川滿壽藏を註に直す。第拾八號拾九頁の初輝のこゑなるに訂正。終りの思へつなひに訂正。(佐藤五頁六頁目録ならなるを神代なからのと訂正す。秋のなぐさ)以後校正者不在のため多化申午臨時準備つたところ不償の故が四、五誤植を發現してしまつた箇中の汚點欄にたへない幸に諒せられよ。皆波

館高重著

第二集 爪を眺める

四六版。美装本。四十頁。五十錢。
(跋文より)……彼の簡潔は詩には北國人の服管から流れ出た純粹な血が脈々と漂つてゐるではないか。技巧を捨てた中には近代人の尖鋭な感覺官能の溢れがあり、閃光的な直線的な心象が澄んだ多月のやうに光つてゐるはじまいか彼は常に新鮮な感情を創つてゆく汗えた秋の月を凝視するとき湧き上つてくる腕の恐ろしい力を感じ暖かい陽に座して遠い山脈を眺める時は山になりたいて現するものは必ずしも幻想のみではない。彼の詩は近頃彼自身にみづちりと即してきた……(庄山横一郎記)

發行所 詩美學社出版部
福井縣金津町六日

公孫樹

十一月一日刊

定價 金拾錢
仲澤露牛 片寄歌二
影山壽志 大伴茂樹
深川秀邦
神戸市龍池通り六丁目八深川方

公孫樹社

太田武主宰

詩誌 塔 毎月一回 頒價十五錢

旭川市六條通り二十二丁目左八

太田方

塔詩社

◎創刊豫告◎

秋山愁子編輯
純女性文藝誌 毛糸人形 一月創刊 頒價拾錢
美術彫寫刷每號四十頁

◇原稿募集◇
詩……………三篇以内
和歌……………五首以内
創作・小品・感想五枚以内
以上すべて原稿用紙使用の事、
原稿の最初に住所姓名明記の事、
投稿者はすべて女性に限る事、
秘密は絶対厳守、切十二月十五日迄
宛名 福島縣平町五丁目詩南社内

毛糸人形詩社
磐城文藝協會會長
和歌選 高久晚霞先生
福島縣平町五丁目詩南社内
發行所 毛糸人形詩社

中野洋品店

平町二丁目
電話五十三番

西村屋藥舖

平町二丁目
鈴木堅助
電話三三番

レコード新譜

著音器の御用は

會田時計店

平町四丁目
電話三六三番

ヤマフル

醸造元 山崎合名會社

電話一〇番

新築移轉

山家メリヤス店

平町二丁目
電話六〇五番

新刊書籍
文具類

マルトモ

平町四丁目
電話二三四番

美術表具

玉成堂

吉田健太郎
平町二丁目北裏通り

平町

大谷時計病院

電話十九番

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K, K A M A Y A

診 療 科 目
内科、小兒科、婦人科、
外科、耳鼻咽喉科、
皮膚病、花柳病科、
レントゲン科、

院長 醫學士 高 久 忠

副院長 新潟醫學士 赤 羽 清

藥局長 藥劑士 佐 竹 菊 雄

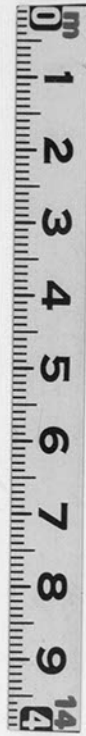
宅診 午前往診 午後

平町字田町六十四

高 久 病 院

(電話 五一三番)

特輯號に付き(頒價廿錢)



菊盛なり、この秋曠古に輝く御即位の盛典は擧げらる、千載の一遇の期何を以てその紀念を永遠に遺さん、之れ萬人一様なる願なり、否赤誠なり、詩南社同人亦その意を表す。

即ち誌上奉祝會を以て至上とす

余本號發行に際して同社同人諸氏の相談を受く、乃ち双手を擧げて讚す。然して得たるは斯れ

原稿の蒐集、整理、編輯此の間僅か一週間時あるのみ、續いて校正、印刷通じて十有二日を出でず、多忙此上なし、従つて御案内漏れ、原稿の遅着配列の不順序に割愛の餘儀なくされたる多し、加へて印刷の不体裁なるものあるは誠に遺憾なり、是只御盛儀中發行の意に有りたればなり、乞ふ諒とせられんことを

只々資金の調達に於ては我々若輩の宜しくする處ならず、徒に日を費す然して御盛儀中に發行をみざりしを遺憾とす、然れ共幸に諸賢の諒且つ援に依り茲に發行をみたるは同人一同の共に幸とする所なり

愚言を以つて諸賢に感謝する所以なり 宮 田 誠 吉

追日 次號は新年御願『田家の朝』に依つて年頭の盛を致し度き意向なれば、後記規定により御寄稿を希ふ

同人一同